

## 「現代の金融政策：理論と実際」

白川方明(著)

日本経済新聞社 2008年3月17日刊

本書はこのたび、第30代日本銀行総裁に就任した白川方明氏による金融政策の本格的な研究書である。京都大学大学院教授であった2006年7月からわずか1年半ばかりの間に書き上げた。

本書は様々な関心から読むことができる。第1に金融政策を運営する立場から、その具体的な問題意識を率直に説明したものとなっている。とりわけ、中央銀行の独立性と説明責任、政策決定会合における意思決定、経済の現状判断に関する不確実性の問題など、学界の金融政策論ではあまり扱われない側面について興味深く書かれている。

第2に、バブル崩壊以後の金融政策運営の決定を解説するドキュメンタリーとして読むこともできる。2001年3月の量的金融緩和政策の導入に向けて検討された問題点、デフレに対する危機意識とゼロ金利制約の評価、さらには1980年代のバブル経済下での資産価格上昇と金融政策に関する考え方について日本銀行内でどのように判断をし、金融政策の新基軸を打ち出していったかが、臨場感をもって再現されている。

ここでの議論から著者の思考パターンが明らかになる。すなわち、先ず歴史的経緯や国際比較、制度比較を通して問題の全体像を掴み、その上で、各種統計や資料を使って現実認識をし、さらに政策論争を整理し、その中で最も現実にふさわしい政策を選択していくという態度である。これは本書の中で著者が繰り返し強調している「学習を続ける組織」としての中央銀行のあり方とも重なる。

第3に、金融政策の立案に日本銀行スタッフの研究がいかに用いられているかを示すものとして読むこともできる。本書で引用されている文献の多くは日本銀行スタッフの手になるものであり、金融政策決定で用いられた資料のレベルを知ることが出来るだろう。

あえて研究書として注文をつけるとすれば、学界の主要文献を直接批判的に検討し、代替案まで理論的に提示してほしかった。

波乱含みの国際金融市場の中で、日本銀行総裁の真価が問われる局面が続くだろうが、白川総裁の今後の活躍に期待するとともに、時宜を得た本書の出版を喜ぶたい。